縹十五句

松岡隆子選

沸点に塩ふる十二月八日　別府　優
雨音と気づきてよりの湯ざめかな　川上昌子
咳込むに顔ぢゆう被ひ優先席　染谷晴子
円やかに老いて蕪の白さかな　佐藤郭子
信州に四つの平星冴ゆる　松原ふみ子
三つ目の橋の向かうの冬景色　中嶋孝子
靴下の十一月の小豆色　相馬晃一
一川に沿ひてはわれも枯野人　鈴木　綾
眉山を描き数へ日も何やかや　広渡詩乃
丁度よき数に落着く冬椿　志立佐知子
青虫の頃の記憶を冬の蝶　梶浦道成
駅を出て海に出るまで銀杏散る　田坂孝志
白瑠璃の坏に載せたし寒月光　冨樫郁子
うつすらと茶毘の煙や山眠る　小村絹代
初冬の雲おく水の静けさよ　藤田幸子